

DOKU-GAKU勝手にチョイス!!

終末のフール

あと3年で世界が終わるなら、何をしますか。
2xxx年。「8年後に小惑星が落ちてきて地球が滅亡する」と発表されて5年後。犯罪がはびこり、秩序は崩壊した混乱の中、仙台市北部の団地に住む人々は、いかにそれぞれの人生を送るのか？ 傑作連作短編集。伊坂幸太郎著。



TICA

朝日新聞で毎週日曜日に連載している〈百年読書会〉。作家の重松清さんをナビゲーターに毎月一冊ずつ同じ本を読み、読者から寄せられた感想文を重松さんが紹介しています。規模の違いは置いておくとして〈DGチョイス〉とその前身〈みんなで読む〉と同じ発想。〈百年読書会〉は内田百閒『ノラヤ』幸田文『おとうと』松本清張『砂の器』など過去の名作が課題に選ばれていて、DGは読む機会が多いだらうと話題性のある最近の本を選んでいきます。どちらも同じ本を読んで自分の感想を言いたいだけでなく、人がどう感じたのかを知りたいという底のところは同じです。

〈百年読書会〉は半年の予定が来年3月までの一年間に延期されました。毎回最終回になりそうな〈DGチョイス〉とは大違い(ノノ) ただDGは、投稿者の400字の文章を文にしてしまうようなことはせず、何千字でも全文掲載です(^^)v

12月の課題の本は『銀河鉄道の夜』。皆さんも参加なされたらいかがでしょう。〈百年読書会〉にも〈DGチョイス〉にも(^^)v

さて今回のチョイスは去年直木賞の選考を辞退して話題になった伊坂幸太郎。最初に軽くて読みやすい『死神の精度』から入り、続いて『重力ピエロ』『魔王』を読んだら読む力がないとついていかれなくなりしばらく遠ざかっていた。

この本は各章でそれぞれの生活が書かれ登場人物がリンクしていく『死神の精度』と同じタイプ。

地球滅亡の発表から5年が経ち、パニックが一段落した残された3年間のうちの風の時代。そこには騒々しきやパニックもののどきどきもなく、ヒーローもいない。どうにか日常を取り戻した実に地味でひっそりとした生活を営む人たちが描かれている。

ずっと望んでいた子供がやっと出来たが地球の滅亡により3才で死ぬことになるのに産むべきかと悩む夫婦と進行性の病を持つ子供を残して死ななくて済むことを喜ぶ友人「太陽のシール」。残された時間をひたすらボクシングに打ち込む青年「鋼鉄のウール」。自殺した両親が遺した本三千冊弱を4年かけて読み終えたところから始まる「冬眠のガール」。5年前に貸し出したままのビデオを回収に行く「深海のポール」…。

明日死ぬかもしれない今日と、3年後には必ず死ぬ今日の違い。どの話もとても面白く読みました。

<明日死ぬとしたら生き方が変わるんですか？>

<あなたの今の生き方は、どれくらい生きるつもりで生きるんですか？>

C a c c o

朝日新聞「百年読書会」はわたしも気がつく限り読んでいます。TICAさんの言うとおりにDGチョイスは毎回同じメンバーで細々続けているという状態ですが、朝日新聞さんは半年続けて応募した人には記念品を出したんだそう。DGもそれやったら応募数あがるのでしょうか？ところでTICAさんがあげた以外に夏目漱石の「ころ」と向田邦子さんの「阿修羅の如く」があったような気がします、TICAさん合ってますか？

今回は太宰治「斜陽」だそうなので、DGもこれに合わせて「斜陽」をやればよかったですら？（今回は勝手に映画「光州事件5・18」をチョイスしております！）

で、本題の今月のチョイス「終末のフール」ですが、なんだかこういうの前にいろいろあったよな、という印象です。この設定で本を書いたら、まあこういう作品になるでしょう、という感じ。「百年読書会」の過去の作品たちとは違って、今の作家さんたちの小説はなぜか軽い気がします。この本を読む前に死なないでよかった！！なんて本はなかなかないですね。ま、そこまでいなくてももう一度読みたいと思わせるくらいは。たとえば漱石の「ころ」は高校の教科書に載っておりました。教科書はもちろん抜粋しか載っておらず、全部読んでみたくて図書館で借りて読み、大人になってから自分で買ってまた読みました。高校の国語の教科書というのはとても記憶に残る作品が載っていました。「山月記」は今でも大好きな作品ですし、太宰治は「走れメロス」と「富嶽百景」が載っていて両方ともとても面白かったです。芥川龍之介は「手布」と「トロッコ」。井伏鱒二「山椒魚」もありました。ま、こんなことを列記しても詮無いですが、過去の作品たちには心をぐっとひきつけるものがあつた気がします。今の作家さんたちは多数の読者の要求に応えようと作品を書いているような気がしてしまうんですね～つまり「売りたい」ってことですが。その気持ちで読みやすさ重視につながっていく・・・言っちゃなんですが漱石なんか読みにくいですよ。でも読んだ後にきちんとなにかが残るところが過去の作品のすごいところでしょうか。